

(報告書)

## 台湾およびミクロネシアにおける檳榔利用

### —過去と現在の比較—

助成研究者 山本宗立(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

#### 1. 研究目的

檳榔 (*Areca catechu* L.) はアジア・オセアニアの幅広い地域で利用されている嗜好品である(中尾 2005)。基本的には檳榔の仁と石灰、キンマ (*Piper betle* L.、葉や花穂を利用) を一緒に噛む。ミャンマーやタイ等の東南アジア大陸部では仁を乾燥させて噛む傾向にあるのに対し、東南アジア島嶼部では生のまま噛むことが多い。インドネシアの檳榔果実は大きく、果実を割いて仁を取り出して仁のみを利用するが、台湾やミクロネシアでは小型の果実を半分に割り、石灰をつけ、キンマの葉で果実を巻いたり、果実でキンマの花穂を挟んだりして、果実をそのまま噛む。地域によっては、キンマだけではなくガンビール(ガンビールノキの乾燥葉、または葉を煮詰めて塊にしたもの) や香辛料(丁子、カルダモン、肉桂等)、そして煙草を加えることがある。

檳榔やキンマ、多くの香辛料は旧大陸原産のため、アジアにおいて過去から利用していたことは想像に難くない。しかし、新大陸原産の煙草を檳榔に混ぜて利用するようになったのは、なぜ、そしていつからなのだろうか。煙草を檳榔に混ぜる場合でも、乾燥させた煙草の葉を刻んで用いる場合や、市販の紙巻き煙草(メントール入りを好む人もいる) を一緒に噛む場合もあり、檳榔噛みにおける煙草利用には多様性がある。しかし、川床(2007)は『世界たばこ紀行』の中で、「台湾では古くから生の“檳榔(ビンロウ、アレカヤシ)”の実が、キンマ(ベテル)の花穂と石灰とともに噛まれているものの、たばこが混ぜられる例はない」と報告している。なぜ台湾だけ煙草を檳榔に利用しないのか、それとも過去には利用していたのだろうか。

東南アジアやオセアニアでは文字に記録されたが資料が少なく、過去における檳榔の詳細な利用方法を知ることは非常に困難である。しかし、台湾においては日本統治時代に詳細な人類学的・民族学的調査が行われており、100年以上前の質の高い資料を多く参照することができる。

そこで、日本統治時代の文献に着目し、台湾および台湾に近接するミクロネシアにおける過去の檳榔利用を調査した。また、両地域において現在の檳榔利用に関する現地調査を行った。

## 2. 研究方法

日本統治時代の台湾およびミクロネシアにおける文献に着目し、台湾に関しては『蕃族慣習調査報告書』・『蕃族調査報告書』、ミクロネシアに関しては『日本統治下ミクロネシア文献目録』から関連文献を選定し、同地域における過去の檳榔利用を調査した。また、2015年8月にミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ諸島・チューク州チューク環礁において、2015年11月に台湾において檳榔利用に関する現地調査を実施した。

## 3. 研究成果

### 3. 1. 台湾原住民族<sup>1</sup>

#### 蕃族慣習調査報告書

『蕃族慣習調査報告書』に記載されていた檳榔利用を表1に示す。北部の山地部に居住するタイヤル（セデック等を含む）やサイシヤットには檳榔の記載がみられなかった。中部の山地部に居住するツォウでは、単語として「フィイ（檳榔子）」や「本族の嗜好物は酒煙草及び檳榔子とす」<sup>2</sup>、そして「本族の諸黨と漢族との間に生じたる関係」に「山面雜租山溪一帶の地に対しては、その地に産出する檳榔子・・・（中略）・・・を番人に給す。之を山面雜租と称し、毎年收穫の約二十分の一を納れしむ」とあるものの、檳榔利用に関する詳細な記述は見られなかった。それに対し、東部の平野部に居住するアミ・プユマ、そして南部の山地部から平野部に居住するパイワン（ルカイを含む）では檳榔に関する記載が数多くみられた。

アミでは檳榔を「イツブ」、キンマを「ビラ」と呼び、嗜好品としてだけではなく、「臍帯は食指の長さに「ブル」にて切り、切り口には檳榔実を噛んだ汁を塗り、切り口を縛ることはない」という薬用例、妊婦の心得として双生児を出産しないために「懐胎前には決して双生檳榔実、双生芭蕉実を食するべからず」という禁忌、結婚式における檳榔の共喫、埋葬時の副葬品、そして様々な祭祀に檳榔が利用されていた。また、社会的な地位がある程度高くなると檳榔を噛むことができないことも明らかとなった。

プユマでは、「西方の山にて「イトウン」（檳榔実に挟み喫するもの）を採り、外に檳榔実と餅を用意し」や「檳榔実（ブラン）と石灰（ボアボアエ）と「ブドゥ」樹（または「シナムル」草）を加え、檳榔実を割き、内に以上の二品を入れてこれを噛み、三品の何れを

---

<sup>1</sup> 台湾原住民族とはオーストロネシア語族に属す人々で、幾度かにわたって東南アジア大陸部から海伝いに、あるいは大陸南部から直接台湾へ移動したと考えられている（山田 2015）。現在 16 民族（タイヤル、セデック、サイシヤット、サオ、タロコ、カバラン、サキザヤ、ツォウ、ブヌン、カナカナブ、サアロア、アミ、プユマ、ルカイ、パイワン、タオ）が台湾政府に認定されており、約 50 万人が山地部・平野部に居住している。日本では「先住民」という語彙が適切とされるが、現地の公称や少数民族の意見を尊重し、本研究では「原住民族」を用いる。日本統治時代、台湾島の平地に住み漢化が進んだ原住民族は「平埔番」や「熟番」、「平埔族」、そして漢化が進んでいない原住民族は「生番」や「高山番」、「高砂族」と呼ばれていた。

<sup>2</sup> 日本統治時代の文献については、読みやすいように文字を適宜変換した。

欠くも赤汁とならず歯染まず且つ興奮することなしという、「割きたる檳榔実中に挟む「ブドゥ」(または「シナルム」)は「タクル」といい、「タクル」は男を意味し、檳榔実は女性に象れり」など、キンマ以外の植物を檳榔に加えて噛むことが明らかとなった。蛸島(2005)および蛸島(私信)によると、「タクル」は蔓<sup>かざら</sup>の意味で少なくとも二種類あり、一つはキンマ、もう一つは「ブドゥ」(サルカズラ)とのことである。また、「イトウン」はトゲカズラで、儀礼時に「イトウンを噛み<sup>3</sup>、それを新トゥマラマオに渡して噛ませる。こうすることによって呪詞の学習が早く進むとされる」(蛸島 2005)とあるため、檳榔に加えていたのもイトウンの葉ではないかと思われる。「シナルム」に関しては現在調査を継続中である。社会的な地位が高くなると檳榔を噛むことができない点はアミと同様であった。

嗜好品以外の檳榔利用としては、「普通は約五十枝、富者は牛車一台の檳榔実を採取し、外に中流者は三束富者は五束の「タクル」(長さ約一尺五寸径約一尺五寸)を用意し」などの結婚式(あるいは婚約時)の婚資・贈答品、「台東平原において新たに移住開拓せんとよくするものは、領主たる両家の一に許可を得、租穀を修るの例を開き・・・(中略)・・・檳榔畑に就いては一樹につき十二房」などの租税、檳榔果実や牛の窃盗および姦通等の刑罰としての果実の支払い、があげられる。アミと同様に、様々な祭祀・祈祷・まじないの場で檳榔が利用されていたが、割った檳榔の果実に「南京玉」を入れて利用する点が、プユマの特徴であると思われた。また、様々な伝説・口承の中に檳榔が数多く出現することから、プユマにとって檳榔は非常に重要な作物の一つであることが明らかとなった。

パイワン(ルカイを含む)では、「テナチャガヌ」(檳榔子と石灰を老葉に包みたるもの)や「檳榔子一個を二つに割りたるもの及石灰を老葉に包み(番人及土人の檳榔子を喫するもの此様にして之を口に入れ噛みてその汁を吐く)」のような嗜好品としての具体的な利用方法とともに、「チナカジャヌ」(檳榔子又は飯入)や「ジャパツ」(檳榔子又は煙草を入れて之を昔より胸に掛くるもの)など、檳榔果実を入れる装飾品に関する記載も見受けられた。アミ・プユマと異なり、「檳榔子(番語「サビキ」)・・・(中略)・・・男女七、八歳より既に之を喫し」のように、社会的な地位等に関係なく、年少時から檳榔を噛む習慣があったようだ。

「歯痛には檳榔子の種の煎汁を用いて含嗽す」や「まらりやに冒されたる時は「ジバラク」(木名)の葉を温めて腹部に当て、あるいは「バジサリシン」(蔓草の名)の根を檳榔子に添へて噛み其液を吞下す」など薬として利用されるほか、埋葬時の副葬品、物々交換、講和・和解、暗号・隠語、動産の賃借、労役の賃金、そして通行租・交換租・水租・山工租・農租等の税としても檳榔果実が使用されており、檳榔はパイワン(ルカイを含む)の日常生活に密接に関わりあう作物であることがわかった。

「最初男家より媒を立て、まず檳榔子五十粒を持って女家に赴き婚儀を提起す。これを「ブ

<sup>3</sup> 利用部位は葉(蛸島 私信)。

ジャカラオ」と云ふ、「数日の後、媒再び檳榔子百粒、酒一瓢を携へ女家に赴き求婚す。之を「ウマジャイスズアヌ」（真実の求婚）と云ふ」など、プユマと同様に婚約や結婚の婚資・贈答品としても檳榔は非常に重要で、「媒人乃檳榔子一粒を取り新郎に與ふれば、郎之を食ふまねして媒に返す。媒それを新婦に渡せば、婦も亦食ふまねして媒に返す」、「兩人を引き寝床に腰掛けしめ檳榔子を取り兩人に与えて食はしむ」のように、結婚の儀礼的共喫として檳榔が利用されていた。「二個連生したる芋、番薯、芭蕉、若しくは檳榔子を食すべからず。若し之を犯せば恐らくは双生児を生むことあらん」などの禁忌のほか、様々な祭祀・祈祷に檳榔が利用されるとともに、「夢に檳榔子を与えられたるは吉にして、狩猟に赴き野猪を捕へし」や「水牛・仙牛甲若しくは檳榔樹又は発銃する所を見は猪を得へく」などの夢占、そして伝説・歌の中にも檳榔が出現しており、アミ・プユマと同様にパイワン（ルカイを含む）の精神文化においても檳榔が非常に重要であることがわかった。

表 1 『番族慣習調査報告書』に記載されている檳榔利用の内訳

項目	番族慣習調査報告書					
	第一巻 たいやる族 (タイヤル・ セデック等)	第二巻 あみす族 (アミ)	第二巻 ぷゆま族 (プユマ)	第三巻 さいせつと族 (サイシヤット)	第四巻 そう族 (ツォウ)	第五巻 ばいわぬ族 (パイワン・ ルカイ)
日常生活(嗜好品・物々交換・ 謝礼・もてなし等)	0	2	3	0	1	9
単語・会話集	0	0	0	0	1	0
暗号・隠語	0	0	0	0	0	2
規則・規範	0	6	4	0	0	0
刑罰	0	0	4	0	0	0
税	0	0	1	0	1	9
農業(栽培・収穫・作物名等)	0	2	4	0	0	3
工芸品(檳榔入・石灰入等)	0	0	1	0	0	4
薬用	0	1	0	0	0	2
結婚(婚約・婚資・式等)	0	1	11	0	0	17
妊娠・出産(禁忌・後産等)	0	2	1	0	0	2
葬制(祈祷・副葬品等)	0	4	3	0	0	4
祭祀・祈祷・まじない等	0	7	2	0	0	17
伝説・口承	0	0	9	0	0	3
歌	0	0	0	0	0	1
夢占	0	0	0	0	0	2
首狩り	0	1	3	0	0	0
戦争	0	0	3	0	0	0
和睦・講和	0	1	1	0	0	4
<b>総計</b>	<b>0</b>	<b>27</b>	<b>50</b>	<b>0</b>	<b>3</b>	<b>79</b>

## 蕃族調査報告書

『蕃族調査報告書』に記載されていた檳榔利用を表 2 に示す。タイヤル・サイシヤットおよび中部の山地部に居住するブヌンには檳榔の記載がみられなかった。セデックでは、「外太魯閣蕃スピキ社」の項に「檳榔樹あれば其名を採りて社名とせり」とあるものの、具体的な檳榔利用に関する記載はなく、またツォウでは「当蕃には檳榔樹なければ煙草を以て唯一の嗜好品とす」（四社蕃）や「当社には檳榔子なければ煙草は嗜好品の唯一なるものとす」（簡仔霧蕃）のように檳榔の利用がない、あるいは「当蕃には檳榔樹なし。以前は土地より其実を購入して噛みしも今は其風全く絶えたり」（阿里山蕃）のように低地から購入していたが現在は利用していない、という記述しかなかった。北中部の山地部では当時檳榔を利用していなかったことが確かめられた。一方、『蕃族慣習調査報告書』と同様に、アミ・プユマ・パイワン（ルカイを含む）では檳榔に関する記載が数多くみられた。

表 2 『蕃族調査報告書』に記載されている檳榔利用の内訳

項目	蕃族調査報告書							
	太么族 (タイヤル)	紗績族 (セデック)	獅設族 (サイシヤット)	曹族 (ツォウ)	武崙族 (ブヌン)	阿眉族 (アミ)	卑南族 (プユマ)	排灣族 (パイワン・ルカイ)
日常生活(嗜好品・物々交換・謝礼・もてなし等)	0	0	0	3	0	10	2	5
単語・会話集	0	0	0	1	0	15	1	0
暗号・隠語	0	0	0	0	0	0	0	0
規則・規範	0	0	0	0	0	1	0	0
刑罰	0	0	0	0	0	0	0	0
税	0	0	0	0	0	0	0	0
農業(栽培・収穫・作物名等)	0	0	0	0	0	2	0	0
工芸品(檳榔入・石灰入等)	0	0	0	0	0	6	1	3
薬用	0	0	0	0	0	0	0	0
結婚(婚約・婚資・式等)	0	0	0	0	0	6	4	25
妊娠・出産(禁忌・後産等)	0	0	0	0	0	3	1	1
葬制(祈祷・副葬品等)	0	0	0	0	0	10	1	9
祭祀・祈祷・まじない等	0	0	0	0	0	22	6	30
伝説・口承	0	2	0	0	0	6	1	7
歌	0	0	0	0	0	1	0	0
夢占	0	0	0	0	0	1	2	2
首狩り	0	0	0	0	0	8	1	13
戦争	0	0	0	0	0	0	0	0
和睦・講和	0	0	0	0	0	2	0	2
<b>総計</b>	<b>0</b>	<b>2</b>	<b>0</b>	<b>4</b>	<b>0</b>	<b>93</b>	<b>20</b>	<b>97</b>

アミでは、「檳榔子は青きを以て味美なりとし、成熟して堅くなりしを好まず。始めて檳榔を咬む者は石灰を多く付けずして嚙む。若し多ければ身体一時に熱を發し汗頻に出でて気分悪しく、宛も始めて煙草を喫して酔へるが如き心地す。堅くなりし檳榔子にありては殊に然り。之れを「マバヨ」(酔)と云ふ。彼等男女の間に交換する檳榔子に斯の如き物ある時は、真情足らざる証として忌む。「ビラ」を添加して嚙む事他社に同じ」(寄密社)や「檳榔の実を「ビラ」の葉に包み、又は茎と共に嚙み、瓢の内より石灰を出して指にて嘗め、紅褐色の唾を吐きつつ仕事し、又煙草を喫するもあり」(馬蘭社)、「檳榔は齒及齒根を固め、胃病を防ぎ、口中の臭気を除くと称し、「ビラ」の茎或は葉と共に石灰をつけて嚙む」「男子は朝(五時頃)起きて、まず檳榔を「ビラ」の葉に包み、或は茎と共に石灰をつけて嚙み、仕事に従事し、洗面することなし」(南勢蕃)のように、嗜好品としての具体的な利用方法の記述が散見され、アミはキンマの葉だけではなく茎も檳榔に加えて嚙んでいたことが明らかとなった。「アルボ 煙草及檳榔子入れの袋」(寄密社)、「アルボ 檳榔及煙草入袋」(馬太鞍社)、「パイツパ 檳榔石灰及「ビラ」を入るる器藤製」「アルブ 檳榔及煙草入」(南勢蕃)など、檳榔等を入れる工芸品に関する記述もみられた。

婚約・結婚に関しては、「男子途中にて懸想する女子に遇ふ時は、其傍に行きて煙草を与へよと迫る。其時女子に意あれば、煙草を与へて男に檳榔子を与へよと乞ふ」(太巴壘社)、「男若し懸想せる女あれば、之を途に要して其意中を探るの機を待つ。偶々遇ふ時は、男先づ袋より檳榔子を取り出して女に与ふ。若し女に意あれば、其檳榔を受くるのみならず、己の携へたる煙草を男に与ふ」(寄密社)のような交際の始まり、そして「毎夜遊びに来る男の中に夫として不足なき者あれば、まず煙草入袋を借り受けて容易に返さず。愈々婚約成立する時始めて其袋に煙草檳榔子及「ビラ」を満たして返却す」(馬太鞍社)のような婚約の場で檳榔が利用されていた。

出産が難産の場合に「酒の変じて酔となりしもの及檳榔子煙草等を妊婦に飲ます」のような薬用例や、埋葬時の副葬品、「墓の上は他の地面より気持高くし、其上へ檳榔子老藤<sup>4</sup>(ロオチン)と平常死者が用いていた煙管に煙草をつめたのと小さな瓢を割って作った柄杓に水を入れたのを供へる」のような墓参り時の供物としても檳榔は利用されていた。

様々な祭祀・祈祷・まじないの場で檳榔が利用されていたほか(図1)、伝説・口承や歌、「檳榔実を貰ふ夢同上」<sup>5</sup>という夢占にも檳榔の記載がみられた。特に、「檳榔と「ビラ」の話」(南勢蕃薄々社)、「母を慰めんとて檳榔と「ビラ」となりし娘の話」(馬太鞍社)、「夫を慰めんとて檳榔樹となりし話」(寄密社)、「姦通せる二人の「チカワサイ」前非を悔いて檳榔及「ビラ」となりし話」(寄密分社)のように、檳榔やキンマが物語の中心となる伝説・口承が存在したことは特記すべきであろう。

プマでは、「鶏鳴を聞きて起き、檳榔実を嚙み、煙草を嗜好し、男子は山に行きて薪を

<sup>4</sup> 老藤はキンマの茎を指すと思われる。脚注5を参照。

<sup>5</sup> 前の煙草の項に「煙草を貰ふ夢は吉但し与ふるは凶」とある。

採り、女子は家にありて炊事或は裁縫に従ひ」や「檳榔実を嗜む事甚たし。社内に入れは竹林の間に檳榔樹の舒々として生ひ茂けれるを見る」との記述があり、嗜好品として檳榔を多用していたことがわかる。また、「キドゥンク」をキンマの代用として檳榔に加えていた。この「キドゥンク」は『番族慣習調査報告書』の「イトゥン」、つまりトゲカズラと思われる。

「家の両親は同じ檳榔実を再び女家に持ち行きて縁談を申込む」や「縁談整えば、男家より檳榔実を五車或は三車女家へ贈る」、「婿は初回の式終れば、其夜女家に赴き、入口に佇む。此時娘の母親は出て庭の中央に檳榔実を置いて婿を呼び入るなり。婿入る時は戸を締めて、親は直ちに寝につく。婿は其儘打ち掛けて檳榔実を嗜む」のように、縁談の場や婚資、結婚式後に檳榔が利用されていた。『番族慣習調査報告書』にも記載されていたように、「南京玉」を入れた檳榔果実が様々な祭祀・祈祷の場で利用されており、「神座・・（中略）・・檳榔枝は厭勝を習ふ時に始めて挿す。社中の者旅行せんと欲すれば来りて、檳榔実一個を借り行き、帰社する時に返す。而して檳榔実皆使用する時は、一年一回厭勝して掛くるなり」のように、檳榔をまず神棚に供え、その後祭祀や祈祷に用いる習慣があったことも明らかとなった（図2）。そして、「檳榔を貰ふ夢 吉」や「檳榔を与ふる夢 凶」のような夢占に関する記述もあった。

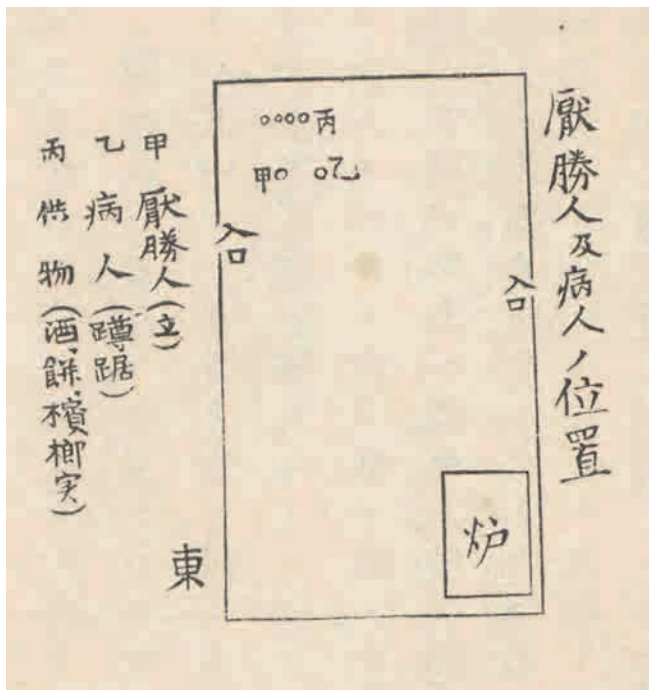


図1 病人への祈祷（アミ・南勢蕃）  
（佐山 1914）

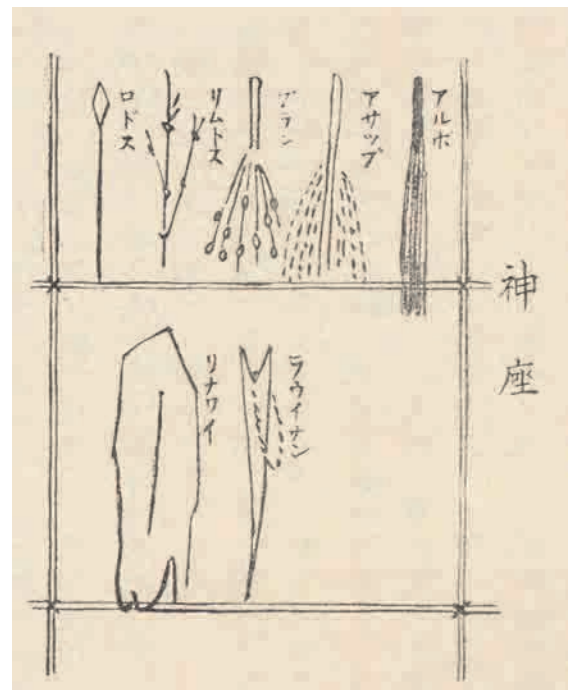


図2 プユマの神棚上段中央にブラン  
（檳榔）をかけている（佐山 1913）

パイワン（ルカイを含む）でも、「一般檳榔子を嗜好す」（ルカイ蕃大南社）や「他人の家を訪問する時には無言にて入る。主人は其時煙草、檳榔子及腰掛を出す」（卑南蕃知本社）など、檳榔は嗜好品（およびもてなす品）として非常に重要だったようで、「山中なれば檳榔子を嚙む者甚だ稀れなり。されど彼等平地に出でて金を得れば、まず檳榔子を買う」（枋寮蕃ラルクルク社）のように、購入してまで檳榔を嚙んでいたようだ。また、檳榔とともに「葛」という語の記述が多くみられた。これはキンマの茎を指すと思われ<sup>6</sup>、アミと同様にキンマの茎も檳榔に加えて嚙んでいたと考えられた。刺青を入れてもらったあとに「施術者を饗し且つ謝礼として酒一甕、現金一円、檳榔子、葛、煙草等を贈る」のように謝礼としての檳榔利用や、「ラパツ（檳榔入袋）」（パリヂャリヂャオ蕃 シンバウヂャン社）や「チャンチャン（石灰入）」（巴望衛蕃チョアチョコ社）などの檳榔に関する工芸品の記述もみられた。

『番族慣習調査報告書』にも数多くの記述がみられたように、パイワン・ルカイでは婚約や結婚の場において檳榔が重要な意味を持つ。例えば、オボオボヂャン蕃アツダス社では、「媒介人はまず腕環、檳榔子、煙草を贈りて、女家の内意を探る。之を「パジャラオ」と云ふ」、「次に女家にて承諾する色あれば、男家より媒介人を通じて銀鎖、檳榔子、塩豚等を贈る。之を「パイソジョアン」と云ふ」、「それより醸酒の日を定む。酒成れば男家にて媒介人新郎の兄弟等を遣して酒、檳榔子、餅、上衣、腰巻及銀鎖等を贈らしむ。之れを「パコジャブ」と云ふ」、「其時<sup>7</sup>は酒壺を兩人の間に置いて、先づ一杯を新郎に勧め、其の飲残を新婦に飲ます。終れば一同に其壺の酒を酌して廻る。尚ほ兩人間にて煙草と檳榔子を嚙む式あり」のように、縁談から結婚式の様々な場面で檳榔が利用されていた。結婚式における檳榔の儀礼的共喫は、「女家に着けば媒介人は新婦を新郎と衝合はす。其時男まず檳榔子を女に与へて嚙ませ、次に自ら嚙む」のように、スボン蕃カスボガカン社でも行われていた。また、「男家にては親戚より贈られたる檳榔子を牛車に積みて女家に贈る。普通三台を例とす」（卑南蕃呂家社）、「媒介者は男家より届けられたる檳榔子二百乃至三百箇、酒一甕を持ちて女家に赴きて縁談を申込む」（巴望衛蕃大竹高社）、「婿には己が耕作地を持参するものあれども、其は伯父等の遺産を受けたる者にして、普通は竹林と檳榔樹を持参する」など、婚資として大量の檳榔果実や檳榔畑を贈答する場合もあったようだ。

アミやプユマと同様に、数多くの祭祀・祈祷等で檳榔が利用されていた（図3）。特筆すべきは、卑南蕃知本社の「ポアラウエ」という新粟食す農耕儀礼では「各戸より「ラバット」、檳榔子、粟を携へて「イヌフラン」に赴き、まず「ラバット」を桑樹に掛け、それより二、三の檳榔子を割りて、其中に南京玉を挿み、別に三粒の粟を一つの檳榔子の中に入

<sup>6</sup> 太麻里蕃太麻里社の結婚の項に「葛（サアウル）」とあり、現地調査の結果、サアウルは茗藤を指すことが明らかになったこと、また現地調査の結果からパイワン（特に東部）がキンマの茎を檳榔に加えて嚙むことが明らかになったため。詳細は現地調査結果参照。

<sup>7</sup> 結婚式。



れて、共に「イヌフラン」の中央に置き神に供へて帰る」、そしてルカイ蕃タルマ社の粟播に関する農耕儀礼では「南京玉を入れたる檳榔子を五箇置きて祖霊に豊作を祈り」のように、プユマに特徴的な「南京玉」をパイワン・ルカイでも利用していたことである。「頭目まず檳榔子、鉄屑、南京玉等にて祈祷し、其より水を撒く社人は其時互に水をかけて宛も雨に濡れたるが如く装ふ。之を「パカホダル」と云ふ」（卑南蕃呂家社）という雨乞いの祈祷や、「物識の老人細竹を割りて其間に茶碗の破片を挟み、其を矢として天に向って射る。其より木葉豚骨、檳榔子、南京玉等を供へて日乞の呪文を唱ふ」（巴壘衛蕃大竹高社）という雨止みの祈祷にも南京玉が利用されていた。

葬制に関しては、「尚ほ埋葬の時死者に南京玉三、四箇入れたる檳榔子を握らせ」（太麻里蕃太麻里社）や、「死後一、二箇月間は毎日霊屋に赴きて食物を供し、又死者の友人等の其前を通行する時には供物す。中には一、二年も毎日行きて霊屋を掃除し、檳榔子を供へて死者の冥福を祈る者あり」（卑南蕃パシカウ社）など副葬品や供物として、また埋葬後の清めに檳榔が利用されていた。

巴壘衛蕃大竹高社の「檳榔樹と葛の話」では「昔檳榔樹を巻きたる葛あり。不思議なれば、其を取りて其に噛みしに赤き汁出でたり。檳榔と葛とは之れ恐らく夫婦ならん」とあり、アミと同様に、檳榔やキンマが物語の中心となる伝説が存在した。また、「吉夢 他人より物を受けたる、檳榔子を受けたる」（卑南蕃呂家社）や「建築に対する夢ト 土、竹、檳榔等に関する夢は吉にして」（プチョル蕃マシリジ社）など、夢占にも檳榔が関係しており、『蕃族調査報告書』でも、パイワン・ルカイの精神文化において檳榔が重要であることが確かめられた。

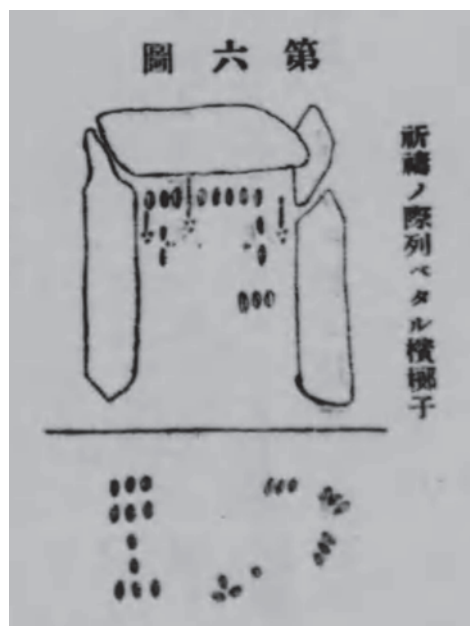


図3 祈祷時の檳榔果実の並べ方（パイワン・卑南蕃呂家社）（佐山1921）

現地調査

2015年11月15日～27日に台湾において29名（タイヤル2名、ツォウ2名、ブヌン6名、アミ4名、プユマ1名、パイワン9名、ルカイ5名）に対して、檳榔の利用に関する聞き取り調査を行った（表3および表4）。

表3 聞き取り調査の地点および檳榔・キンマ・石灰・煙草の現地名

通番	民族名	性別	年齢	調査地	現地名			
					檳榔	キンマ	石灰	煙草
1	タイヤル	男性	82	宜蘭県南澳郷東澳	ピンロウ	わからない	セツカイ	—
2	タイヤル	男性	69	宜蘭県南澳郷東澳	ピンロウ	なし	なし	—
3	ツォウ	男性	55	嘉義県阿里山郷茶山	fii'i	sayao (hungu?)	hapuyu	tamaku
4	ツォウ	男性	74	嘉義県阿里山郷茶山	—	sayau	—	tamaku
5	ブヌン	女性	105	花蓮市卓溪郷卓溪	sav(b?)iki	vila	apul	tamako
6	ブヌン	男性	34	花蓮市卓溪郷卓溪	saviki	vila	abul	tamako
7	ブヌン	男性	53	花蓮市卓溪郷卓溪	saviki	vila, vila qau: 荖藤	apul	tamaku
8	ブヌン	男性	89	花蓮市卓溪郷卓溪	saviki	vila, vila qau(茎、つまり荖藤)、qamami(花、つまり花穂)	—	—
9	ブヌン	男性	26	台東県海端郷加拿	saviki	vila, vila utung: 野生のキンマ	—	—
10	ブヌン	男性	27	台東県海端郷初来	saviki	vila	—	—
11	アミ	男性	92	花蓮市玉里鎮高寮	'icep, saviki	fila'	apol	tamako
12	アミ	女性	55	花蓮市吉安郷	icep	vila	apul	tavako
13	アミ	男性	50	花蓮市光復郷太巴壠	icep	vila, akaway: 茎から根の部分	?	tamako (takasako?)
14	アミ	女性	67	台東県東河郷都蘭	'icep	fila', falo(u): 花、awakai: 荖藤	(')apul	tamaku(o)
15	プユマ	女性	57	台東市寶桑里	puran	traker: 荖藤(およびキンマ?), bira(葉のこと?)	abu(h?)	tamaku
16	パイワン	女性	48	台東県太麻里郷太麻里	saviki	asav, cakel: 茎	avu	tamaku
17	パイワン	男性	—	台東県金峰郷歴坵村	saviki	asau (asav?), zangaw: 荖藤	kavu	chamaku
18	パイワン	女性	62	台東県金峰郷嘉蘭	saviki	ceker, pudu': 花、asau(asav?): 葉	avu	tamake
19	パイワン	女性	60	台東県金峰郷嘉蘭	saviki	ceker, pudu': 花、asau: 葉	avu	djamaku
20	パイワン	女性	59	台東県達仁郷土坂	saviki, paruk: 仁	キンマ2種類: ce(a)ke(u)r(野生の荖、硬いから茎は加えない)、zangau(葉・茎・花すべて加えること可能)、asau: 葉、puju: 花	qavu (avu)	tamaku
21	パイワン	男性	52	台東県達仁郷大竹	saviki	zangaw: 荖藤、pujui: 花、asau (asav?): 葉	kavu(e)	chamaku(e)
22	パイワン	男性	65	台東県達仁郷達仁	savii	zangau: キンマおよび荖茎、puju: 花、asau na zangau: 葉	qavu	chamau
23	パイワン	男性	78	屏東県泰武郷平和	saviki	zangav(zangau?): キンマおよび荖藤、pudu('?): 花、asau: 葉	kavu	tamaku
24	パイワン	女性	60	屏東県滿州郷長楽	saviki	zangaw: 荖藤、puju: 花、sasau: 葉	kavu	chamaku
25	ルカイ	女性	75	高雄市茂林区多納	thaviki	d(z)angaw, pidou: 花	abuku	tamaku
26	ルカイ	女性	66	屏東県三地門郷青葉	sabiki	dangau, chakur: 野生のキンマ、pudo: 花、chural: 茎	abu	tamaku
27	ルカイ	女性	88	屏東県霧台郷好茶	sab(v?)iki	lyangau, pudu (pudu?): 花	abu	tamaku
28	ルカイ	男性	79	屏東県霧台郷好茶	sabiki	d(z)anganu, chural da pudu(pudu?): 荖藤、花	abu	tamaku
29	ルカイ	女性	84	屏東県霧台郷霧台	sabiki	zangau, churalyu da zangau: 荖藤?、pulyu: 花、vasau: 葉?	abu	tamaku

表 4 台湾原住民族の檳榔の利用方法

通番	民族名	檳榔に加えるもの		何歳から 噛むか	檳榔に関する道具	薬用	婚約・ 結婚	祭祀・祈祷	伝説
		(煙草以外)	(煙草)						
1	タイヤル	キンマ(葉)	なし	—	—	なし	なし	なし	なし
2	タイヤル	キンマ(葉)	なし	—	—	なし	なし	なし	なし
3	ツォウ	キンマ(葉)	なし	—	—	なし	なし	なし	なし
4	ツォウ	キンマ(葉)	なし	—	—	なし	なし	なし	なし
5	ブヌン	キンマ(葉)	なし	—	—	なし	なし	なし	なし
6	ブヌン	キンマ(葉・茎、ただ し茎は現在利用 少)、山胡椒、梅干 し	なし	高校生	—	なし	なし	あり	なし
7	ブヌン	キンマ(葉・茎、ただ し茎は現在利用少)	なし	年少時	—	なし	なし	なし	なし
8	ブヌン	キンマ(葉)、(山胡 椒、アミの利用方 法)	なし	(噛まない からわから ない)	—	檳榔を噛 む人は歯 が強い	なし	なし	なし
9	ブヌン	キンマ(葉・茎)	なし	年少時	—	なし	なし	なし	なし
10	ブヌン	キンマ(葉・茎)	なし	年少時	—	なし	なし	なし	なし
11	アミ	キンマ(葉・茎)、山 胡椒(imoc)	なし	年少時	檳榔の果実を取る 道具:sapi odawis	檳榔を噛 むと口臭 がない	あり	あり (現在なし)	あり
12	アミ	キンマ(葉・花)、 cihak(加えるときは 石灰をいれない)、 imoc	あり	年少時	—	なし	あり	あり	なし
13	アミ	キンマ(葉・茎)	なし	年少時	—	なし	あり	あり	なし
14	アミ	キンマ(葉・花・茎)、 imoc	なし	年少時	—	檳榔を噛 むと口臭 がない	あり	なし	なし
15	プユマ	キンマ(葉・花・茎)	なし	年少時	—	疲れをと る	不明	あり	なし
16	パイワン	キンマ(葉・花・茎)、 梅干し、陳皮、煙草 のヤニ(liyok)	あり	年少時	果実を割る小刀: siqunu	なし	あり	あり (現在なし)	なし
17	パイワン	キンマ(葉・花・茎)、 陳皮、煙草のヤニ (liyok)	なし	年少時	—	なし	あり	あり (現在なし)	なし
18	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	あり	年少時	—	解熱	あり	なし	なし
19	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	あり	年少時	石灰を入れる器: djangdjang	なし	不明	あり	なし
20	パイワン	キンマ(葉・花・茎)、 榕(djaralyap)の樹 皮	あり	年少時	—	下痢、夏 ばて	あり	なし	なし
21	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	なし	年少時	—	なし	あり	なし	なし
22	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	あり	年少時	—	なし	あり	あり (現在なし)	なし
23	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	なし	年少時	—	なし	あり	なし	なし
24	パイワン	キンマ(葉・花・茎)	あり	年少時	—	物忘れ	あり	なし	なし
25	ルカイ	キンマ(葉・花・茎)	なし	年少時	—	なし	不明	なし	なし
26	ルカイ	キンマ(葉・花・茎)	なし	年少時	—	目やに、 傷	あり	あり	なし
27	ルカイ	キンマ(葉・花・茎)	あり	結婚後	—	なし	不明	なし	なし
28	ルカイ	キンマ(葉・花・茎)	あり	年少時	果実を割る小刀: taketi	なし	あり	なし	なし
29	ルカイ	キンマ(葉・花・茎)	なし	結婚後	—	なし	あり	なし	なし

北部の山地部に居住するタイヤルは、「小さいときに檳榔はなかった。民国 36 年（1947 年）花蓮へ勉強に行った。同学年が食べていた。ためしてみたら中毒みたいになり、病院へいくことになった。民国 80 年（1991 年）に花蓮で苗を買ってきた。お金になると思い植えたがうまくいかなかった」（男性・82 歳）や「小さいときは誰も檳榔を食べていなかった。1984 年でも檳榔を食べる人は少なかった」（男性・69 歳）と回答し、檳榔を噛む習慣は近年のもので、過去には利用していなかったことが確かめられた。中部の山地部に居住するツォウも「昔は茶山村にも里佳村<sup>8</sup>にも檳榔はなかった。民国 80 年代（1990 年代）に入ってからではないだろうか。煙草は以前からあった」（男性・74 歳）や「檳榔は以前なかった。あるいはあっても少なかったように思う」（男性・55 歳）と同様の回答をした。タイヤル・ツォウでは、檳榔に加えるものとしてはキンマ（特に葉）しかなく、結婚式における利用や、精神文化（儀礼・祈祷等）における利用も本調査では確認することができなかった（表 4）。

中部東側の山地部（から低地部）に居住するブヌンは、「集落はもともと山の奥にあり、8 歳のときに低地へおりてきた。山には檳榔はなかった。低地では食べていた」（女性・105 歳）や「昔の集落は山の奥にあり、檳榔はなかった」（男性・89 歳）など、日本統治時代に高地部の集落に住んでいた年配の方々は、過去に利用していなかったと回答したが、「小さいとき、祖母が食べていた」（男性・53 歳）や「生まれたときからまわりみんなが食べていた」（男性・34 歳）のように、低地に移住してからは檳榔を利用していたようだ。檳榔を噛み始める時期は年少時から高校生で、檳榔噛みに関するブヌン特有の規則・規律は認められなかった。檳榔に加えるものとしては、キンマ（主に葉）のほか、山胡椒（クスノキ科植物の果実）や梅干しが挙げられたが、煙草の利用は見られなかった（表 4）。「檳榔を噛む人は歯が強い」（男性・89 歳）との回答はあったものの、他の薬用例は本調査では得られなかった。「今は猟へ行くとき、森に入る入口の石などに、酒をコップの半分まで入れたものを 3 つ置き、その手前に 3 つの檳榔、そして火をつけた 3 本の煙草、肉を置く」「墓参りのとき、檳榔が好きだった人には供物として捧げることもある」（男性・34 歳）など儀礼的な檳榔利用の回答を得られたが、「昔は、猟の時には獲れた獲物の一部を置いてくるだけで、檳榔などは持っていかなかった」（男性・89 歳）ようで、近年導入された利用方法と思われた。

アミは 4 名とも昔から檳榔を利用していると回答したが、檳榔を噛み始める時期は年少時からであり、日本統治時代には存在した規則・規律（ある程度の社会的地位にならないと檳榔を噛むことができない）が現在適用されていないことが明らかとなった。檳榔に加えるものとしては、キンマ（葉・花・茎）のほか、山胡椒（*imoc*）や *cihak* (*Callicarpa formosana*、ムラサキシキブの仲間、[呉 2000]) が挙げられた。また、「祖母が煙草を

<sup>8</sup> 嘉義県阿里山郷里佳村。

檳榔に加えていたが、人により好き嫌いがあつた」(女性・55歳)と煙草を檳榔に加えていた事例が確認された。現在は石灰を購入しているが、過去には「白い石をあぶる。そして急に冷水にいれると、すーと水に溶けていく」(男性・92歳)や「貝殻を燃やして作って使っていた」(女性・55歳)のように、自家製の石灰を用いていた。檳榔の薬用例としては「疲れをとる」(女性・57歳)や「檳榔を噛むと口臭がない」(男性・92歳、女性・67歳)が得られた。

「結婚式では檳榔が必要」(男性・92歳)や「結婚式するとき、果実がたくさんついた枝ごとの檳榔を出すのは当たり前で、キンマの葉や荖藤もたくさん出す」(男性・50歳)のように、結婚式で檳榔が贈答として利用されるだけではなく、「婚約を *pa'icep*<sup>9</sup> という。檳榔の美しい房を贈る。今は購入したレディーメイドの檳榔を配ることが多い」(女性・67歳)のように檳榔の言葉自体が婚約を意味したり、結婚式ときには「1つの檳榔を噛みあい、これを結婚式のために地面に埋める。 *masangisangisal* という」(女性・55歳)のような儀礼的に檳榔の果実を共喫する事例も確認された。現在でもアミにおいては婚約・結婚の場で檳榔が非常に重要な意味を持つことが明らかとなった。

「霊が関係するすべての祭りにおいて檳榔を使う」(女性・55歳)や「昔も今も儀礼や占いのときに檳榔を使う」「山や川へ猟に行くとき、神にささげるため、餅、檳榔、キンマ、米酒などを持っていく」(男性・50歳)のように、アミは現在でも祭祀・祈祷等に檳榔を利用することが確かめられた。また、『番族慣習調査報告書』や『蕃族調査報告書』に記載されていたような講和時に檳榔を利用する伝説を覚えている男性がいた。

光復には大きな村が2つ(バタアンとタバロン)あった。昔15年もの間戦争をしていた。各村の頭目の夫人が戦争をやめないとほろぶ、男が生まれると戦争して死ぬため男を生んでも仕方がない。だから、今度男が生まれたり殺してしまうぞ、と旦那を脅した。そこで、村の若者10~15名ずつ使者として送らせて、一週間ほど講和をした。最後に7つの檳榔を半分にして1つをバタアン、1つをタバロンに置いて、酒も何本か置いて祈り、どちらかが約束を破ったら半分になる、つまりめっちゃくちゃにしてやる、とした。この和解のことを *misasepaw* という」(男性・92歳)

プユマは1名のみ聞き取りではあるが、やはり昔から檳榔を利用しており、檳榔を噛み始める時期は年少時からであった。檳榔に加えるものとしてはキンマ(葉・花・茎)のみであった。また、現在でも檳榔を様々な祭祀・祈祷に用いており、そのときに割った檳榔に南京玉を入れることが確認された(図4)。

---

<sup>9</sup> *'icep* は檳榔の意。



図 4 猟へ出かける時の儀礼に用いられる檳榔および南京玉を入れた檳榔（台東市寶桑里）

パイワンは 9 名とも昔から檳榔を利用していると回答し、檳榔を噛み始める時期は年少時からであった。檳榔に加えるものとしてはキンマ（葉・花・茎）、梅干し、陳皮、榕（*djaralyap*）の樹皮等であった。また 9 名のうち 7 名が煙草を檳榔に加えて噛んでいる人を見たことがあると答えた。「同級生が煙草を加えて檳榔を食べている。女性が煙草を吸うのはよくないけど、檳榔に入ればわからない」（女性・60 歳）という事例もあった。「煙草を吸うパイプ（*uncu*）についてのヤニ（*liyok*）をとって、石灰とともにキンマについで食べた」（女性・48 歳）のように、煙草のヤニを檳榔に加える場合もあり、その理由は「石灰が多いと口の中が痛くなるが、それを防ぐため」とのことであった。「檳榔の果実だけを食べて熱が下がる」（女性・62 歳）、「下痢のときには檳榔果実をそのまま食べる。夏バテのときも同じようにする」（女性・59 歳）、「檳榔を食べると物忘れがよくなる」（女性・60 歳）など、檳榔を薬として利用していた。

「婚約のことを *pu-saviki*<sup>10</sup> という。檳榔や茗藤、豚肉などを肩にかついで運ぶ。男性から女性の家へ送る」（女性・59 歳）、「結婚式の時、男性が檳榔を用意して女性におくる」（女性・48 歳）、「檳榔の房と茗の葉や茗藤を結婚式の時運ぶ」（女性・62 歳）、「最初、檳榔・米酒・餅を男性が女性のところへ持っていき、縁談の話をする。結婚式のときは、檳榔・石灰・キンマ（葉も茎も）を持っていく」（男性・78 歳）など、アミと同様に、現在でもパイワンにおいては婚約・結婚の場で檳榔が非常に重要な意味を持つことが明らかとなった（図 5）。

「檳榔の頭飾りに用いる。檳榔屋でかざってあった檳榔の模造品をもらってきて自分で作った。昔から結婚式のときの頭かざりに檳榔を使っていた」（男性・78 歳）や「頭飾りに用いる。ナス科の植物がないとき、檳榔の果実（緑）で頭の輪をつくる」（女性・62 歳）など帽子の装飾に檳榔を用いていた（図 6）。ただし、「檳榔の頭飾りは最近はあるけど、

<sup>10</sup> *saviki* は檳榔の意。

以前はなかった。普通はナス科の *ljasalas* を用いる」(女性・59歳)のように最近の利用方法と回答する人もいた。

「祖母がパリシ<sup>11</sup>で檳榔を使っているのをみたことはあるが、詳細はよくわからない。病気の人などに使っていた」(女性・48歳)、「祭礼のときパリシが檳榔を並べていた。また呪いのときは檳榔に切れ目をいれて、茗藤と鉄片を入れて呪っていた。二つをいれることで霊力が増す」(男性・65歳)、「昔南王系のパイワンの人がいた。檳榔にイナシ<sup>12</sup>を入れて呪いをかけていた。また、運動会るとき檳榔をたくさんもってきて、祈りをして、子供一人一人に渡しておまもりにして渡していた。たぶんイナシが入っていた」(女性・60歳)のように、現在でも祈祷・まじない等で檳榔を利用することが明らかとなった。また、「一つの檳榔の果実に2つの仁が入っていることがある。普通のよりは丸い。昔は食べなかった。なぜならこれを食べると双生児が生まれるから」(女性・60歳)のような禁忌の事例も確認された。

ルカイは5名とも昔から檳榔を利用していると回答し、3名は年少時から檳榔を噛んでいたが、2名は結婚後から檳榔を噛み始めたとのことだった。檳榔に加えるものとしてはキンマ(葉・花・茎)のみであった。ただし、2名は煙草を檳榔に加えて噛んでいる人を見たことがあると答えた。「へた付きのまま鶏のお腹の中に入れて煮込む。目やにが多いときや口に傷があるときに飲むとよい」(女性・66歳)という薬用の事例が確認された。また、「婚約や結婚式の時、男性の家族も女の家族も檳榔を持ちよる」(女性・66歳)や「男性は好きな女性に檳榔を手に乗せてわたす」(男性・79歳)など、婚約や結婚式場で檳榔が利用されていた。「山へ猟に行くとき、山の神に檳榔・酒を置いて祈る」(女性・66歳)のように、祈祷に檳榔が用いられていた。



図5 パイワンの結婚式で運ばれる檳榔  
・キンマの茎(茗藤)(台東県太麻里)



図6 帽子の装飾に用いられている檳榔  
の模造品(屏東県泰武郷平和)

<sup>11</sup> 祈祷師。

<sup>12</sup> 南京玉。

### 3. 2. ミクロネシア

台湾と異なりミクロネシアでは日本統治時代に体系的な人類学的調査が行われておらず、檳榔利用に関する情報が記載されている書籍が少なかった。ただし、「太平洋諸島中西部の諸島に住する土人は、一種の嗜好物を愛する所あり。其尤とも盛に嗜む島は、先づマリヤナ、ヤープ、パラオの三群島とす。此三群島の土人は「チウ」と称するものを烟草よりも嗜めり。其材料は何かと云へば、「ビルロ」樹の実と、「ネーブ」草の葉、「石灰」との三種にして、如何なる場合、如何なる時も此の三種を所持せざる時なし」（鈴木 1944）、「檳榔樹の実を噛む習俗は・・・（中略）・・・現今ではヤップ、パラオ及び西カロリン地方一帯に行はれている」（染木 1945）、「パラオ、ヤップの島民が僅かに植栽するに過ぎず」（金平 1933）、そして『大東亜の原住民族』（日本拓殖協会 1943）のチュークの項に「檳榔子及カーワの如き嗜好品は無い」、パラオの項に「嗜好品としては、ヤップ島の場合と同様に、檳榔子が知られて居る」、チャモロ族の項に「嗜好品としては檳榔子が知られて居た」とある。日本統治時代は、主にマリアナ諸島やパラオ、ミクロネシア連邦ヤップ州において檳榔が嗜好品として利用されていたようだ。

檳榔とキンマ、石灰のみの利用の記述が多い中、「これを噛むと渋甘い。まことに渋い味があって、慣れると煙草と同じようにちょっとやめられないようになる。はじめての人だったら少し酔うように感ずるが、海などから帰って寒いような時にこれを噛むと暖かになるように感ずる。パラオ人はこれとともに少量の煙草をも合わせて噛むのを大変に好むが、これを噛むと赤い唾がしきりに出るので、常にぺっぺとその赤い唾を吐くので、慣れない人はまことにきたならしく、気味悪く感ずる」（土方 1992）と、パラオでは戦前から檳榔を噛むときに煙草を加える習慣があったことが確かめられた。

土方（1993）の『パラオの神話と伝説』には、「カブイ（キンマ）のはじめ」や「ムデヒー・ベラウ神話」、「オラカル神話」、「ア・ウヘル・スンの伝説」、「パラオの勇者」、「テーデーブヌグツ神話」、「ア・イガスの二人の娘」、「或る兄弟の話」、「グルムハイスの鼠」、「孝行になった男の話」などの神話の中で檳榔やキンマが利用されており、パラオでは精神文化においても檳榔が非常に重要であることがわかった。

日本統治時代に檳榔の利用が盛んであったミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ諸島、そして檳榔利用がなかった（あるいは少なかった）チューク州チューク環礁において、2015年8月に檳榔利用に関する調査を行った。ヤップ諸島において檳榔を日常的に噛む17人に聞き取り調査を実施したところ、全員が檳榔に煙草を加えて噛む、と答えた。うち4名はウォッカに漬けた紙巻き煙草を利用していた（図7）。ウォッカに漬けた紙巻き煙草を檳榔ではさんで食べると、香りがとてもよく、また口の中がいつもよりも熱く感じられた。また、「子供のころから年寄は檳榔に煙草を加えて噛んでいた」（男性・79歳）との回答を得た。染木（1945）の『ミクロネシアの風土と民具』に「彼等の最も好む煙草は外国製の薫の高いロープ煙草（半湿性でロープの如くに撚つてある）」とあり、ヤップ諸島の複数の



年配の方が「ロープ状の煙草はとても香りがよく、檳榔に加えるとおいしかった」という情報とも一致した。パラオと同様に、ヤップ諸島でも戦前から檳榔に煙草を加えて噛む習慣があったと思われる。本調査では檳榔の葉としての利用や、儀礼等における檳榔利用の情報は得られなかった。

チューク環礁ピス島においては、過去には檳榔を利用しておらず、1980年代～1990年代になってから檳榔を噛むようになった、との回答を5名より得た。日本統治時代の資料でも、ヤップ州やパラオでは檳榔利用の報告が多いのに対し、チューク環礁以東では檳榔利用の報告が少ないことと一致する。現在は檳榔に煙草を加えて噛んでおり、一時グアムに滞在していた島民から、グアムでは丁子やカルダモンを加えて噛むこともある、との情報を得た。実際にグアムの商店では、檳榔やキンマ、石灰とともに丁子やカルダモンが販売されていた（図8）。



図7 ウォッカに漬けた紙巻きたばこ（左）を檳榔にはさみキンマを巻いて噛む（右）



図8 グアムで seeds として檳榔や石灰（左）とともに売られている丁子・カルダモン（右）

#### 4. 考察

現在、台湾原住民族の多くが檳榔を嗜好品として利用している。しかし、文献調査から台湾の北部から中部の山地部に居住する原住民族（タイヤル・セデック・サイシャット・ツォウ・ブヌン）は、日本統治時代に檳榔を利用していなかったことが明らかとなった。タイヤル・ツォウ・ブヌンに対する聞き取り調査からも、檳榔利用が近年のものであることが確かめられた。一部のブヌンは猟へ行くときの祈祷に檳榔を用いていたが、隣接して暮らすアミからの影響であろうと答えており、基本的にはタイヤル・ツォウ・ブヌンの現在の檳榔利用は嗜好品のみといえる。

それに対し、東部の平野部に居住するアミ・プユマや南部の山地部から平野部に居住するパイワン・ルカイは、過去から現在にいたるまで、嗜好品としてだけでなく、婚約・結婚式の場における贈答品や共喫に、さらに様々な祭祀・祈祷・まじない等の精神文化に檳榔を利用してきたことが明らかとなった。過去からの主な変化としては、①アミ・プユマではある程度の社会的地位にならないと檳榔を噛むことが過去にはできなかったが、現在では年少時から利用している、つまり伝統的な規則・規範が現在では適用されていない点、②現在でも祭祀・祈祷・まじない等で檳榔を利用している人や地域はあるものの、キリスト教化により祈祷師がいなくなった、あるいはプユマの祈祷師によると「若い世代が祭祀・祈祷・まじない等に興味がなく、伝統知を伝えることができない」などの理由により、過去と比べて精神文化における檳榔利用が非常に少なくなっている点、があげられる。1990年代～2000年代にかけて原住民族の固有文化を守ろうとする機運が高まり、多様な伝統知を集積した書籍等が発売されているものの、実際には集落単位では伝統知を若い世代へうまく伝えられていないと思われた。ただし、婚約・結婚式における檳榔の重要性は依然として高く、地域によっては過去と比べて豪華（より多くの檳榔やキンマを贈答品として用意）になっているようで、檳榔およびキンマを婚約・結婚式の場で贈答する行為が、原住民族のアイデンティティとして表象されている可能性がある。

ミクロネシアでは、神話に檳榔がでてくるものの、祭祀・祈祷等には檳榔を用いておらず、また薬としての利用方法も文献・現地調査では確認することができなかった。一部の台湾原住民族の檳榔利用が多岐にわたっているのに対し、ミクロネシアにおいては過去から現在まで基本的には檳榔を嗜好品としてのみ利用していると思われた。

最後に、台湾およびミクロネシアにおいて檳榔に加えられる植物、特に煙草に注目して考察してみたい。まず、日本統治時代の資料では、台湾原住民族のアミ・パイワン（ルカイを含む）はキンマのみを利用しており、プユマはその他に「プドゥ」（サルカズラ）や「イトゥン」（トゲカズラ）を檳榔に加えていた。ただし、「キドゥンク」（蒟葉<sup>13</sup>の代）とあるように、サルカズラやトゲカズラの葉をキンマの代用として利用していたと思われる。日

<sup>13</sup> キンマの意。

本統治時代の資料からは、台湾原住民族は檳榔・石灰・キンマ（およびその代用の葉）を一式として利用し、他の植物を加えていなかったと考えられる。一方ミクロネシアでは、戦前からパラオにおいて煙草を檳榔に加えており、また現地調査結果からヤップ諸島でも同様の習慣が認められた。これら地域では、檳榔・石灰・キンマに加え、煙草や他の植物（香草類等、現地調査結果）を一式として利用してきたと思われる。

ここで、他の資金により行ったインドネシア・マルク州における檳榔に「煙草を加える／加えない」の事例を紹介したい。マルク州のアンボン島および隣接するセラム島では、檳榔・石灰・キンマ（葉・花穂）に加え、煙草、丁子、ナツメグ、ショウガ等の植物を加えていた。一方、セラム島から約 200km 南東に位置するケイ諸島では、檳榔・石灰・キンマ（葉・花穂）の一式のみで、煙草を含めた他の植物を一切加えていなかった。

檳榔の噛み料として利用の起源はインドからマレーシアと考えられており（中尾 2005）、起源地周辺では様々な植物を檳榔に加えて利用している。そして、加えられる植物の多くは旧大陸、しかもインドから東南アジア原産である。一つの仮説として、様々な植物を加えて檳榔を噛んでいた地域では、新大陸起源の煙草（しかも嗜好品）を檳榔に加えて噛むことに対し、抵抗感がなかったのではないかと提示したい。一方、台湾に檳榔（およびその嗜好品としての利用）が伝播するまでに、キンマ以外の植物が脱落（採集できない、栽培できない等の理由）し、台湾では檳榔・石灰・キンマの一式になってから長い時間が経過したため、他の植物を檳榔に加えて噛む習慣が発達せず、煙草も取り入れられなかった、と考えることはできないだろうか。9 名の台湾原住民族が、煙草を檳榔に加えて噛むのを見たことがある、と回答したものの、実際に日本統治時代から煙草を加えていたかどうかは不明であるし、好みによって煙草を加える人がいたという程度で、過去から現在まで一般的な噛み方ではなかったと考えられる。

現地調査の結果、台湾原住民族は山胡椒や梅干し、陳皮等を現在檳榔に加えることがあることが明らかとなった。ただし、複数のアミが「山胡椒を加えるようになったのは最近である」と回答し、「小琉球では山胡椒を檳榔に加えて噛む、とテレビで見た。その後、台北に住む妹は山胡椒を檳榔に加えて噛みはじめた」（花蓮市卓溪郷卓溪で民宿を営むアミの女性）との情報も得られた。また、檳榔屋では梅干しや陳皮を加えた檳榔が売られているが、近年に導入された利用方法であった。あるプユマの女性は「台湾では煙草を檳榔に加えている人は見たことがない。ただし、東南アジアだったように思うが、煙草を檳榔に加えて噛むのをテレビで見たことはある」とも話していた。近年の情報網の発達により、台湾原住民族は檳榔・石灰・キンマの一式に、現在では他の植物を加えるようになった可能性も否めないと思われる。

今後も現地調査および文献調査を継続し、アジア・オセアニアにおける檳榔利用を地域間・民族間で比較検討して、「煙草を加える／加えない」の理由を明らかにするとともに、本研究で提示した仮説を検証したいと考えている。

## 5. 引用文献

- 呉 雪月、『台湾新野菜主義』、大樹文化事業股份有限公司、2000。
- 金平亮三、『南洋群島植物誌』、南洋庁、1933。
- 川床邦夫、『世界たばこ紀行』、山愛書院、2007。
- 小島由道ほか、『蕃族慣習調査報告書』全 8 巻 (I: たいやる族、1915 年、II 花蓮港庁あみす族・台東庁あみす族・台東庁ふゆま族、1915 年、III: さいせつと族、1917 年、IV: つおう族、1918 年、V: ぱいわぬ族、1920 年、VI: ぱいわぬ族、1922 年、VII: ぱいわぬ族、1921 年、VIII: ぱいわぬ族、1920 年)、臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会、1915-1922。
- 佐山融吉、『蕃族調査報告書』全 8 巻 (I: 大么族前篇、1918 年、II: 大么族後篇、1920 年、III: 紗績族前篇・後篇、1917 年、IV: 曹族、1915 年、V: 排灣族・獅設族、1921 年、VI: 武崙族前篇、1919 年、VII: 阿眉族奇密社・太巴塢社・馬太鞍社・海岸蕃、1914 年、VIII: 阿眉族南勢蕃・馬蘭社・卑南族卑南社、1913 年)、臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会、1913-1921。
- 鈴木頸勲、『南洋風物誌』、日本講演協会、1994。
- 染木 煦、『ミクロネシアの風土と民具』、彰考書院、1945。
- 蛸島 直、「ムサップ：台湾先住民プユマの成巫儀礼 (2)」、『日本映像民俗学の会ニュース・レター』、2005、第 19 号、11-12 頁。
- 中尾佐助、『中尾佐助著作集第 II 巻一料理の起源と食文化一』、北海道大学図書刊行会、2005。
- 日本拓殖協会、『大東亜の原住民族』、岡倉書房、1943。
- 土方久功、『土方久功著作集第 7 巻 流木ー孤島に生きて』、三一書房、1992。
- 土方久功、『土方久功著作集第三巻パラオの神話と伝説』、三一書房、1993。
- 山口洋児、『日本統治下ミクロネシア文献目録』、風響社、2000。
- 山田仁史、『首狩の宗教民族学』、筑摩書房、2015。

## 6. 英文アブストラクト

Use of *Areca catechu* (Betel Nut) by the Indigenous Peoples of Taiwan and Micronesia

Sota YAMAMOTO (Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University)

Betel nut (*Areca catechu* L.) is popular for chewing throughout the Asia-Pacific region. Basically, people chew the betel nut with the leaves (and/or inflorescence) of *Piper betle* L. and lime. Other substances are often added to the above three, in particular spices (e.g., cloves, cardamom, cinnamon, etc.), gambir, and tobacco according to local preferences. However, Kawatoko (2007) reported that people in Taiwan do not add tobacco to the betel nut when chewing. In this study, usage of the betel nut by the indigenous peoples of Taiwan and people in Micronesia near Taiwan was studied to reveal whether they add (or had ever added) tobacco when chewing betel nut. In *Banzoku Kanshuu Chousa Houkokusho* (1915-1922) and *Banzoku Chousa Houkokusho* (1913-1921), which are detailed reports of the indigenous peoples of Taiwan by Japanese anthropologists, there are many records of betel nut usage (including medical and ritual), especially for Amis, Puyuma, Paiwan and Rukai peoples, but chewing betel nut with tobacco was not found. However, a field survey conducted in November 2015, identified that 9 (1 Amis, 6 Paiwan, and 2 Rukai) of the 29 people interviewed had observed some people chewing betel nut with tobacco. This is the first record of this usage from Taiwan, but betel nut chewing with tobacco does not appear popular in Taiwan. By contrast, Hijikata (1992) reported that people in Palau chewed betel nut with tobacco when Japanese occupied the region before World War II. Moreover, a field survey conducted in August 2015, suggested that people in the Yap Islands also seemed to have chewed betel nut with tobacco before the World War II. It is thereby confirmed that the betel nut chewing with tobacco has been continuously popular in this region of Micronesia.